

令和2年度大阪府

在宅医療移行支援事業

(在宅医療普及促進事業)

在宅医療担当理事 米 田 円

【おしごと】

大阪府は、地域医療介護総合確保基金（医療分野）を活用した在宅医療の理解促進のための普及啓発支援事業および体制強化事業として、平成30年度より補助事業「大阪府在宅医療移行支援事業（在宅医療普及促進事業）」を開始しています。当初から本会は毎年事業参加していましたが、平成30年度は「ACP（アドバンス・ケア・プランニング）：人生の最終段階の医療・ケアについて、本人が家族等や医療・ケアチームと事前に繰り返し話し合うプロセス、通称「人生会議」を含む在宅医療の理解促進研修」でした。令和元年度は「ACPの理解促進研修」がその事業内容でしたが、台風や新型コロナウイルス感染流行

の影響で、予定していたメインの講演会が中止に追い込まれることとなり、成果（事業実績）としては、「在宅連携、ネットワーク」の改訂および同ノートに挟み込むACP啓発用リーフレット作成にとどまるのみとなりました。令和2年度事業に参加するにあたり、大阪府から提示された事業主旨としては、令和元年度と全く同一の内容となっております。

【事業目的】

在宅医療に携わる医療従事者等を対象に、ACPを含め、平成30年3月に改定された「人生の最終段階における医療・ケアの決定プロセスに対するガイドライン（以下、ガイドライン）」の理解を促進することで、ガイドラインを実践し、患者・家族を支援する。

【事業実施内容】

本会では、在宅医療推進事業の一環として、これまでに在宅医療を考える会を定期的に開催して参りました。ここでは、会長、副会長をはじめ、在宅医療に従事している診療所会員、北

サポコーディネーター、北区訪問看護ステーション所長を構成メンバーとして、事業展開にあたっての様々な課題等について協議しております。本事業の実施について、令和2年7月18日に開催された第28回在宅医療を考える会にて協議した結果、在宅医療に携わる医療従事者を対象とした講演会を第10回在宅医療勉強会として、10月24日(土)本会会館5階中島谷ホールで開催することに決定しました。講演テーマや講師につきましては、前年度中止になっていた内容をそのまま踏襲することに参加者からの賛同を得ました。即ち、テーマを「人生の最終段階を在宅で支えるための意思決定支援」ACPの基本的な考え方・実践方法」とし、講師は、秀社会クリニック院長 熊野宏二先生、佛教大学保健医療技術学部 看護学科 准教授 濱吉美穂先生にお願いすることとなりました。熊野先生からは演題「人生の最終段階における医療・ケアの決定プロセスに関するガイドラインおよびACPについて」を、濱吉先生からは演題「医療・介護現場におけるACPの実践」をタイトルとしてご講演頂くことになりました。なお、新型コロナウイルス感染症流行の収束に目途がないという予測のもと、当日は感染症拡大防止のために、会場参加およびWeb参加によるハイブリッド形式で開催することとしました。Web配信のためのサービスシステムは「Zoomウェビナー」を利用しました。このシステムを採用したのは、現存する複数のWeb会議

システムのなかでも、オンラインセミナーや講演会に特化し、使用しやすいという利点があることが理由でした。Web配信自体、本会では初めての取り組みであり、その準備作業には、以前から本会と提携しているHAK(ホームページ制作・システム開発業者)定本克彦氏の協力も頂くことにしました。ハードとしては、監視モニター用PC、Webカメラ、スピーカーホン等の備品が必要でした。10月6日に講師の濱吉先生(Web参加)を含め、田淵義勝会長や理事の先生、北サポコーディネーター、事務局の参加からなる予行演習を実施するなど、約5回の予行を経て、漸く本番が開催される運びとなりました。Web参加予定者にはあらかじめ、事前登録のためにメールアドレスを確認するとともに、「Zoomウェビナー」参加マニュアルを送信し、出来る限りスムーズに勉強会に参加できる手配をしました。

勉強会当日は会場内の飛沫感染防止策として、参加者全員にマスク着用をお願いし、座席間隔を確保、演台や司会者席の前には透明アクリル板を設置しました(図1)。

講演内容について、熊野先生からはガイドラインにつき詳しくかつ分かりやすくご解説頂きました。ご自身のご施設(有床診療所)では、看取りもご熱心に取組まれておられ、特に「看取りカンファレンス」という患者さんを中心とした人生の最終段階における意思決定支援のためのカンファレンスのご紹介や



図1：会場風景



図2：熊野宏二先生



図3：濱吉美穂先生

問題点などを解説頂きました(図2)。また濱吉先生はご自身の体験からACPの重要性に逸早く気付かれ、当初からその周知・啓発活動を続けてこられました。本講演では、ご自身が作成・編集された「わたしのいきかた手帳」を参考資料として、明日からの在宅医療・介護の現場において即座に役立つACPの実践方法につきご教示いただきました(図3)。また、お二方とも講演のなかで、新型コロナウイルス感染症流行期においては感染者との面会が制限され、意志疎通性を図ることが困難になることから、事前に話し合いのプロセスをもつことに重きを

置くこのACPについて、改めて強く意識付けしておく必要性を強調されました。各講演終了後の質疑応答では、会場参加者およびWeb参加者から、口頭(音声)やQ&A入力方式で質問を受けつけ、講師からの応答がスムーズになされました。全体を通じて、講演中の音声や画面表示などで大きなトラブルなく、無事に終了しました。参加者は計33名で、その内Web参加が20名でした。また職種では、医師16名、看護師7名、ケアマネジャー5名、その他5名でした。

勉強会終了後、会場参加者には用紙にて、Web参加者には

オンラインでアンケート調査を実施し、20名から回答が寄せられました。その結果、勉強会の内容について、「大変良かった」、「良かった」を合わせると95%でした(図4)。Web参加十会

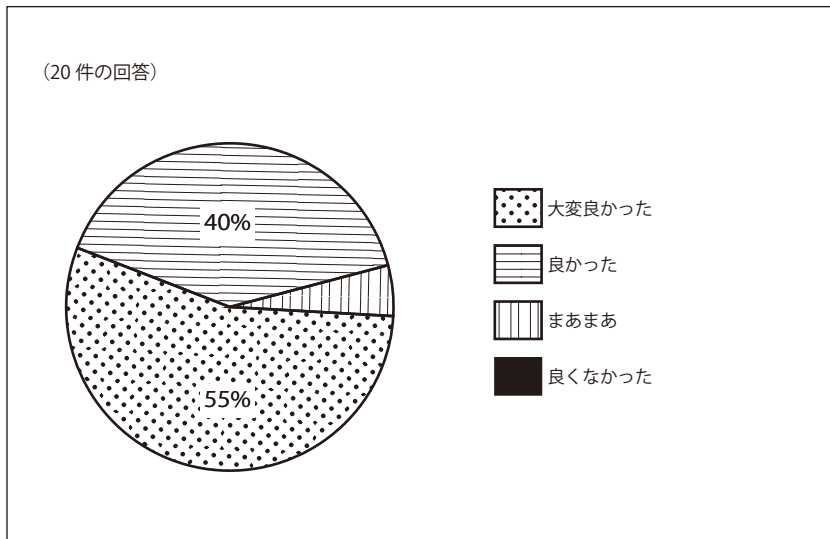


図4：勉強会の内容について

場参加型としたことについて、「次回もこの形式がよい」は85%、「次回はWeb講演がよい」は15%であり(図5)、Web開催を希望される理由として、「新型コロナウイルス感染流行

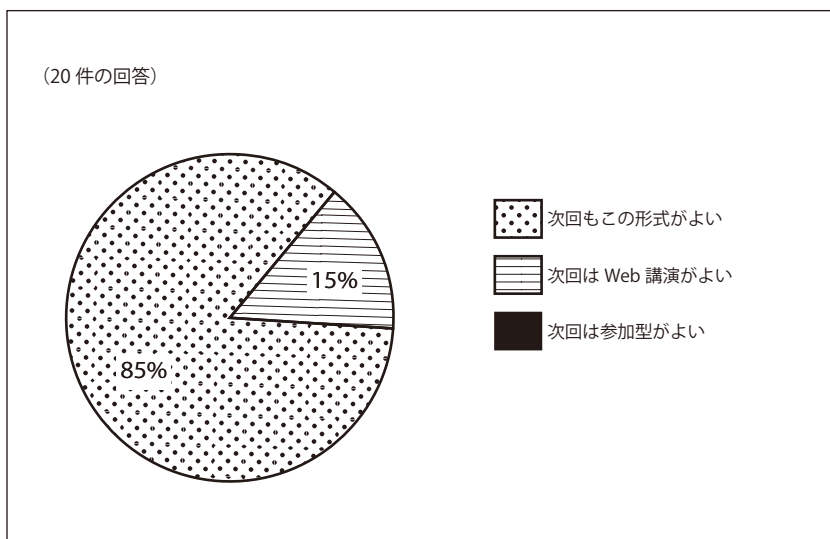


図5：Web+参加型講演としたことについて

「ACCPに関する事例検討」などACCPにまつわる第二弾的な
「収束していない」ことや「利便性」を挙げられる方が多くを
占めていました(図6)。また、来年度の勉強会の内容として、

(7件の回答)

蜜を避け、かつ、貴重な講演をできるだけ大勢の人が話しを聞くためには、
こうした形が良いと思います。

コロナ終息しないと思われるから

来場が難しくても Web で内容を聴けるのはありがたいです。

今後の会議、研修会に使用できる。

移動時間の短縮 / 感染対策の上なら

新型コロナが完全に収束されたわけではないので

コロナが増えている時は集まらない方が良いのでは、コロナが終息していたら
参加型でも良いと思います。

図6：Web+参加型講演がよかった理由

内容や「新型コロナウイルス感染症」と関連づけたテーマを希
望される意見が多くみられました(図7)。
このACCPを含め、先述のガイドライン内容につきまして

(8件の回答)

ACPの第2弾・・・実践例についての考案

新型コロナウイルス感染症と介護・医療の対応

癌性疼痛(在宅患者さんでの麻薬の使用の実際)
在宅看取りについて

ACPは毎年開催してほしい。新型コロナウイルス感染症で、今後生き方・暮らし方が
大きく変化してくると思うので様々なケースを通して勉強していきたい。

第2回ACP勉強会(事例紹介)在宅みとり

ACPの事例検討会

ACPのテーマを続けるのであれば実践例を発表し合うのもいいと思います。

コロナなどの感染症に関する内容

図7：来年度開催予定の勉強会内容について

は、昨今、厚生労働省が高齢多死社会の進行に伴い、地域包括ケアシステム構築に対応するための施策としていますが、これは私共医療従事者にとって、今後も在宅の場で多職種連携を図りつつ、患者個人の意志を尊重し、人生の最終段階を迎える過程において重要な作業内容になるものと思われまます。また、新型コロナウイルス感染症流行のなか、ACPの位置づけを認識できたという点でも、本講演内容はまさに時宜を得た有意義なものであったと考えられました。今後におきまして、本勉強会で知り得たノウハウを在宅の現場に活かしていけるなら本望です。し、勉強会や研修会を適宜企画し、ACPについて繰り返し考える機会を作っていきたい所存です。

本題から少し外れますが、今回、感染拡大防止のために、会場参加およびWeb参加によるハイブリッド形式で開催したことについては、その準備や調整に多少手間がかかりはしましたが、他方、双方の通信環境さえ整っていれば、「視聴が容易で、「画像が明瞭」、「場所を選ばず効率的」、「レコーディング機能が有り振り返りが可能」、「アンケート調査結果の回収・分析作業が容易」であるなど、Web開催自体のメリットが多いことも分かりました。新型コロナウイルス感染症の流行は、治療法確立やワクチン普及がかなり先の話になることが予想されており、まだ収束が見込めない以上、感染症拡大予防を鑑みて、Web同時開催は今後も継続が必要かもしれません。

【最後に】

本事業実施にあたり、講演準備のために、ご多忙中にも関わらず、多大なるご尽力を頂きました田淵会長はじめ、本会執行部の先生方、在宅医療を考える会委員の方、北サポコーディネーター、HAKの定本克彦氏、そして準備のためにすぐご協力頂いた事務局全職員の方に深謝申し上げます。